



『冠』1998年
オーナメント(金属、ナイロン、針金)、
プラスチック類、セロハンテープ
100×55×50mm



『スーパーマン』2002年
清涼菓子(菓子、プラスチック容器)、
ビニール袋、紐、ひも(合皮)、
みかんのレプリカ、セロハンテープ
80×130×70mm

『肩たたき』2000年
木枝、パズルのおもちゃ(プラスチック)、
セロハンテープ
35×325×45mm



八島 孝一 Koichi Yashima

1963年～ /大阪府在住

八島さんの作るオブジェはいずれも手のひらの上に乗るような小さなサイズで、その材料のすべてが「彼が拾い集めたモノ」でできています。

普通に歩けば30分とかからない福祉施設への道を、彼は2時間近くもかけてやってきます。なぜかという、それは道中ひたすら地面に目を凝らしてモノを拾っているからなのです。お菓子の箱、針金、ボタンやおモチャのかげら。施設に到着すると、嬉しそうに自分の「箱」に入れます。その後それらをセロハンテープで繋ぎ合わせては、不思議なオブジェ(物)を作るのです。

そのきっかけもおもしろい。彼のモノ拾い癖は以前からあったのですが、1996年腸管出血性大腸菌O157が流行した時、汚いからと禁止されてしまいました。彼はしばらく必死でこの癖を我慢していたようですが、「拾うだけでなく、これで何かを作れば大丈夫かもしれない」と、

彼は考えついたようです。福祉施設のスタッフも彼の思いを受け止め、その小さな「作品」を一つ一つ箱に入れて保存してきました。

「小さなモノ」には、人をひきつける魅力が確かにあります。数年前に自分が作った作品を手にとって眺める時も、彼が心をうばわれているのは作った形そのものではなく、一つ一つの部品だということが、彼のうっとりした目線からうかがえました。何かを作るために材料を集めるといふ順番ではなく、愛したモノたちを繋ぎ合わせていくうちに、何かのイメージを見つけないという方法なのでしょう。だからこそ、彼の作品には驚くようなイメージの自由さがあふれているのです。



『落下傘』2006年
洗濯バサミ(プラスチック、金属)、
袋(ナイロン)、プラスチック容器、
セロハンテープ
110×140×40mm



『鏡餅』2004年
ビーズ、人形(プラスチック)、
ナイロン、発砲スチロール、
箱(紙)、貝殻、セロハンテープ
125×85×80mm



『ロケット』2001年
シール(紙)、使用後の花火、
髪留め(ゴム、プラスチック)、
プラスチック類、セロハンテープ
160×50×15mm

八島 孝一